



かなであん

-249-0002 逗子市山の根1-7-24
Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

二つの気づきを味わう 親鸞聖人のみ教え

皆さんと仏教との縁はいつ
何から始まったでしょうか。

ほとんどの方は大切な家族
の死に接した経験からだと思っ
ますが、自分自身が命に向き合っ
た病気が縁の方もおられます。

* * *

『出家とその弟子』の名著
で文豪口マン・ロランを感激さ
せた倉田百三は、生まれながら
カリエスの持病を背負い、青春
時代も寝たきりの日が続き、精
神の鋭敏な彼は、世に何の貢献
もできていない自分の存在意義
を真剣に疑います。そして苦悩
と自問の果てに、ふと「気づき」
ます。そのことを『生活と一枚
の宗教』という回心の記録に著
しています。

人間がこの世に生きている
のは能力や徳性によるものでは
ない。ただ許されて生きている
のだ。そうでなければ人間はど
うして動植物の命を頂戴して暮
らすことができようか。許され
ていることだけが人間の生存の
根拠であり、その根拠において
ノーベル賞を受けるような賢者
も、自分のようにベッドの上に
寝ているだけの人間も何の差異
もないのだ……。

こう気づき、これを、“後ろ
を見る眼”が開けたと表現して
います。このことは倉田にとっ
ても大きな開眼（回心）でした。

たとえば、私たちは空気がな
ければ一時も生きられません。
そして、その空気は恵みであり
人間が作っているものではありません。だからこそ、金持ちだ
ろうと貧乏人だろうと、役に立
つ人間であれその能力を失った
人であれ、善人であれ悪人であ
れ、無条件に吸わせてくれる。
まさに吸うことが許されている
のです。

何気なく吸っているその空気
も、太陽により、水により、さ
らに動植物の、またその生き死
ににより、絶え間なく生成され
ているおかげです。科学的にそ
の原理が解明されていても、人
間には生命の源を創り出すこと
はできません。反対に壊してし
まう傲慢さをもっている。それ
が真理です。

自分を生かし続けてくれてい
る力に気づく、これが第一の気
づきです。しかし、それだけで
は「あそうか」の知識だけで終
わってしまいます。その次に私
たちが “第二の気づき” 「その
ことに気づいてなかった自分に
気づく」ということができると
いう、これまた気づきです。

それもただ気づくのではない、
“頭が下がる” ということです。
頭を下げるならやろうと思えば
できるでしょう。しかし、ほん
とうに心から頭が下がることは
簡単なことではありません。

そのような私たちに「こうい
う自分であったのだな、恥ずか
しいのは自分のことであったの
だな」と頷かせて下さるのが親
鸞聖人のみ教えです。

浄土真宗のお念仏のみ教えの
寛容は、いつも初ごと初ごと、
我がこと我がことと、「聞く、
聴く」ことだとお聞かせいた
くのは、まさに「気づく」とい
う「気づき」の難しさと重要さ
に、それこそ「気づかされる」
ものなのです。

* * *

多くの宗祖の中で親鸞聖人ほ
ど我が身の罪業を感じていた方
はおられません。聖人が歩まれ
た「非僧非俗」のご一生は、出
家独身であるより苦悩の尽きな
いものだったと偲ばれます。家
庭を持ち妻子を持てば綺麗事
で済まない思いも起こり、また求
道生活では家族にも迷惑をかけ
たでしょう。そんな日々の求道
生活、家庭生活、在家生活のつ
くり出す罪へのおののきとい
うべきものに真っ向から向き合
い、偽善を恐れ、謙虚をもって全
てのなりわいを思いやり、お念
仏の仲間をみな同じく「御同業
御同朋」と敬い合いながら、他
力に生き抜かれ私たちにお示し
下さった生き方を、私たちはお
慕いするのです。報恩講はそ
んな親鸞聖人のご法事です。ま
た一つ我がことに気づかせて
いただけるでしょう。 合掌

宗祖親鸞聖人報恩講

日時

11月26日(月)

午前11時より

「真宗宗歌」

正信偈

法話

ご文章拝読

「恩徳讃」

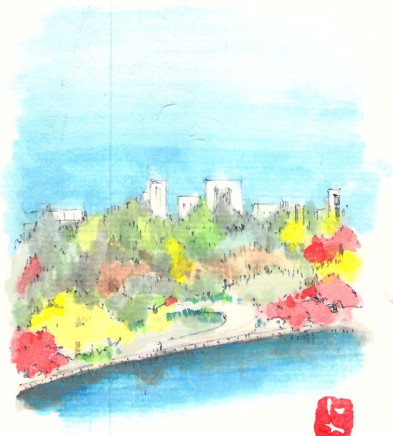
～*～

おとき

今年は塩害の影響で紅葉は少し残念ですが、穏やかで澄んだ実りの秋を思わせるこの時期に、親鸞聖人のご法事、「報恩感謝」の「報恩講」は勤められてきました。

ご門徒と共々にお仏具のおみがきをして特別のお荘厳に設え、境内や参道を掃除し、収穫した野菜を持ち寄っておときを作るという「お待ち受け」の伝統は、華やいだ温かな思い出として身に染み込んでいます。これがご法事の本来のあり方だと味わえます。

どうぞお参り下さい。



仏教が生んだ日本語

【家風】

家風に合うとか合わないとかと聞けば旧体制の遺物のようであるが、今なお生きている語だ。一般的には、一家庭の生活様式や習わしを指して言うが、その環境は型や振る舞いだけでなく、考え方や言葉にも現れるもので、お寺にも同様に「寺風」がある。

本来は「臨済の風」というように、各師家が採る表現方法や弟子の指導の仕方を指して「家風」と言った。これは師から弟子へとのおのずから伝わって、各系統の宗風、各門流の門風を形成し、その意味で家風という言葉は使われる。これは単なる風習とは違って、その道に練磨された者のみがおのずからそなえ、また継承することのできる風格のようなもので、単なる型の伝習というようなものではない。

価値観の変化で聞かれなくなった言葉に「威儀を正す」がある。この威儀は、仏教で大切にされてきたもので、行・住・坐・臥を四威儀というが、要するに日常の立ち居振る舞いのことである。その一つ一つが仏の法にかなっており、それを見たり聞いたりした人が心地よいと感ずることで威儀即仏法という。

今日、残念ながら僧はもとより、あらゆる職業に、人として「威儀を正す」ということが顧みられていないように思える。だから、本来その職につくべきでない人がなったり、変にオールマテイの人間をよしとし、それがその職を軽くして、ますます本質が失われていく。その一番の問題は、その自分に気づかず恥じないことだろう。

(大谷大学編参考)

編集後記

先月末から入院生活(20日現在)を余儀なくされている。胆石発作が発端で担ぎ込まれたのだが、厄介で長引いている。実感としては3年前の癌闘病より大変で、その主なものが「痛み」である。■絶対安静と絶食は、みるみる筋力を失わせ、体力もどんどん落ちる。「痛い」という心身の「痛み」は非常に大きなストレスで、どこがどう痛いのかを的確に伝えることの難しさを痛感している。本人がそうなのだから、他に伝えるのは難しく、医者だってわからないのではないかと思ってしまう。かといって、どうせわからないからと突き放されても不安で辛いものである。■大災害が続く中で便利(?)に使われた「人に寄り添って」も、何か綺麗事、他人事に聞こえて「そんな言葉で済むものじゃない」と叫びたかった人も多いだろう。■痛みには、多くの経験に培われた対処が唯一本人をホッとさせる。人生いろいろな修羅場や経験はせずに済めば幸いだが、ほとんどの人がそういうわけにはいかない中で、辛さの経験は必ず他に役立ってきた。自分が経験したものの凄い「痛み」も他の人の理解に役立つだろうか。その時には「それはこうだ」などと断定し、訴えの言葉の鼻先を折ってはならないと思う。■耳は一方的な受け身な器官だ。人間にその器官が備えられている意味を考える。聴く(聞く)ということは、当然だがまず聞くことである。それをしっかり聞かないで、分かったような結論、ましてや誤った方向におさめて終わってはならないのは、お念仏のお聴聞への姿勢と同じだと、お任せの病室の天井が聞かせてくれる。 Norimaru